

令和元年度 第1回桂川町総合教育会議会議録

日 時 令和元年9月25日（水）
場 所 桂川町住民センター2階 視聴覚室
開 会 13時00分
閉 会 14時41分
出席者 井上町長、大庭教育長、河部教育委員、畠中教育委員、新宮教育委員、
皆越教育委員、原中企画財政課長、北原学校教育課長、尾園社会教育課長、
松尾教務係長、石井指導主幹
傍 聴 人 0人

○（北原学校教育課長） それでは、時間となりましたので、令和元年度桂川町総合教育会議を始めたいと思います。桂川町総合教育会議の設置要綱第4条に基づきまして、本会議は町長が招集し、総合教育会議の議長となると規定されておりますので、議事進行につきましては、町長のほうから進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○（井上議長） では、皆さん、こんにちは。ただいま申されましたように、令和元年度第1回目の総合教育会議ということで、よく考えますと、その前に、昨年12月に教育長が交代されて、現在の大庭教育長になられて、初めてのこの会議でもあろうと思っております。そういう意味では、前任者の瓜生教育長のときもいろいろと皆さんで協議をしてみりました。そのことも踏まえまして、さらに今後どのように本町の教育について協議をしていくのかが、一つの大きな転換期だと、そのように思っております。

規定によりまして議長ということですが、内容については、まずは教育長のほうから報告を受け、そして、あとはフリートキングのような形になるかと思っておりますけれども、皆さん方との意見の交換等をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、早速ですが、議題の1番として、桂川町の児童生徒の学力向上について、これを議題といたします。

まず、内容について、教育長のほうから説明をお願いします。

○（大庭教育長） 私、昨年12月に就任をいたしまして、初めての総合教育会議というところで、これまで桂川町が培ってきた教育について、ただいま誠心誠意取り組んでいるところでございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

この総合教育会議の目的といたしましては、本来は町の施策に対して教育の果たす役割は何かというところが中心になるところだろうとは思っておりますが、大もとにはこのような形の桂川

町の教育大綱というものがございます。この教育大綱に基づいて、さまざまな施策、事業等々の説明になろうかとは思っておりますが、やはりその中でも、児童生徒の健やかな成長を育むというところにつきまして、まずは、やはり学校教育、家庭教育、その他もろもろの基本である学力というところについて、ちょっと説明をさせていただきたいというふうに思っておりますので、よろしく願いをいたします。

お手元に全国学力学習状況調査経年変化というふうなところがございます。学力については、いろんな考え方があろうかとは思っておりますが、これは国のほうが決めました、児童生徒のある一定の学習状況を計るものとして導入されたものでございます。それが平成19年から導入をされてきたところでございます。このグラフからわかりますように、始まった当初の平成19年において、全国平均から比較しますと、ほとんどがもうマイナス10ポイントというふうな形で、桂川町としては非常に厳しいような状況でございました。年を追いながら、当然子どもたちも、この学力調査を受ける子どもたちも変わってはくるところではございますが、やはりその年年によって大きく上がり下がりが多ございました。こういった中で、町のほうから少人数学級という配置をいただきながら、その成果と申しますか、それが若干の上がり下がりはあるものの、右肩上がりの傾向になってきたのではないかなというふうに思っているところでございます。学校のほうも、この少人数学級の効果というのも十分に生かしきっていたというところは判断できるのではないかなというふうに思っているところでございます。

しかしながら、実は、何ですか、ここ2年ほどを見ていますと、非常に低下傾向に陥っているというところが、非常に私ども教育委員会としては危惧をしているところであります。

その要因として考えられるところについてなのですが、それぞれの学校において、十分な学習というのは取り組まれてはいるとは思いますが、今年の全国学力学習状況調査の資料から考えてみますと、全国的、福岡県平均からも、特に今年度においては大きく落ち込んでいる状況でございます。この落ち込んでいる要因といたしましては、2枚目になりますが、これは、それぞれの学力のテスト結果を分析したもので、とにかく非常にここに上げている小学校国語・算数、中学校国語・数学・英語、こういったところに非常に課題があると。特に、ここに示している丸の部分については、全国平均から大きく落ち込んでいる項目でございます。

そしてまた、この調査におきましては、質問紙調査というものがございます。この質問紙調査の中を見ましても、特に家庭、学校生活に関する質問調査からになりますと、朝食摂取に関しましては、全国平均から大きく落ち込んでいる。家庭学習時間も個人差が非常に大きく、全国平均と比較しても少ない。また、新聞を読んでいる割合というのは、これは全国平均から大きく落ち込んでいるというふうな状況でございます。

一方、授業に対する質問紙調査からは、子どもたちには国語・算数・数学の勉強が非常に好き

であると答えた者は、全国平均よりも高くなっている。また、国語・算数・数学の授業を自分なりに理解していると答えた児童生徒の割合は、全国平均よりも高くなっています。3枚目になりますが、国語・算数・数学の学習に対して粘り強く取り組んでいると答えた児童は、全国平均よりも非常に高くなっている。桂川町の現状として、こういったところに課題があるのではないかなというふうに思っています。

桂川町の児童生徒の実情といたしましては、こと学力に関しまして、小中学校との国語・算数・数学における基礎的な知識に関しては、身につけているとの割合が非常に多くなっています。しかしながら、小学校では漢字の定着度が低いという結果になります。国語科に関しましては、活用に関する問題、いわゆる文章をもとに資料と結びつける、または自分の考えを筋道立って表現している、そうしたところに課題がございます。算数・数学においては、グラフから読み取る、図形の求積、数量関係、このような活用に関する課題が顕著にあらわれています。質問紙調査からは、基本的な生活習慣が身につけていない割合が多く、家庭学習の時間も少なく、学校外での取り組みが必要になってくると考えられます。学習に関する、授業に関する取り組み方については、非常に児童生徒はセルフイメージが高いことが伺われますが、結果として学習の定着度に結びついていない。こういったところが児童の現状でございます。

これを受けまして、今後、桂川町として取り組まなくてはならないところとしましては、全国・県平均から大きく落ち込んでいる現状から、学習の定着度が高まる授業改善が必要であると考えます。また、先ほど申しましたように、児童生徒は授業・学習についてのセルフイメージは非常に高いものの、結果として学力の向上に結びついていない。このことは、日々の授業や学習活動に満足をしていて、それ以上のところを求めきれていないということがあることから、レベルアップを図る必要があると考えます。そして、全体の底上げを目指していく上では、学級、学年、そういった独自の取り組みだけではなく、学校総体が一体となって組織的に学力向上策を改善していく必要があると考えます。学校だけではなく、家庭にも協力を願って、テレビ、スマホ、ゲーム、そういった時間を減らし、家庭学習に充てる時間を増やしていく必要があると考えます。

私ども教育委員会といたしましても、これまでの学力向上策というのを見直して、検証・改善、こういったサイクルを学校のほうに徹底させていく必要がある。なぜこのような形を私が非常に危機感を持っているかというと、現在、高校入試に至っては、基礎問題は当然あるものの、活用力を重視する問題が出される傾向になっています。2021年度入学の大学入試に関しましても、ほぼ活用力のみの問題になっています。基礎学力は十分つけていながら、さらに活用をしていく、自分の考えを表現していく、判断していく、そういった力をつけていくことが、子どもたちの進路を保証していくことになるというふうに考えています。ですから、このテストが行われているのは小学校6年生と中学校3年生ですが、ただ単にこの該当学年だけの問題ではなくて、先ほど

言いましたように、学校全体で今この学年のときにどんな力をつけていかなければならないか、それが中学校を卒業した15の春を迎えるときに、子どもの希望する進路をしっかりと保証していくことに繋がっていくと考えています。この学力向上というのは、単に学校だけに任せていくことではないと思っています。家庭でも、地域でも、そして我々教育行政にとっても、しっかりと子どもの進路を保証していくためにも、最低限の学力だけはしっかりと身につけていく必要があるというふうに考えております。

私のほうからは以上でございます。

- （井上議長） 学力の向上についてということで、現在の町内の子どもたちの学力については、2つの懸念の変化ということ、それから、今回の調査に基づく考察も含めて教育長のほうから話がありました。学力という言葉はもうしょっちゅう使われる言葉ですし、学力向上というのは当たり前、みんな望んでいることではありますが、ただ、それは早々簡単にいくものではないということも御承知のとおりだと思います。ただいまの教育長の説明、報告の中でも結構ですし、それ以外の部分でも構いませんけれども、皆さんのほうから御意見等ございましたら、お願いをしたいと思います。

何か個人的に、この表をそれこそ、ここに来ていただいたわけですがけれども、説明の中にありましたように、昨年から今年にかけて非常に小中学校ともに、いわゆる点数が落ちていますよね。これはどんなふうに捉えたらいいのでしょうか。何か気になることがありますか。ただ単に、子どもたちはもう毎年毎年変わっていくわけですが、ただ単にたまたまこうなったということなのか。先ほど教育長が言われたように、町を挙げて学力向上に取り組んでいくという、その施策的な部分で考えるべきところもあるのか。

- （河部教育委員） 基本的には、私は、一つは、やはり学年によって学力の差が、やはりあるというところですね。今の中学1年生のところは、やはり小学校のときから、やはり学力が低かったと。全体としてですけども。昨年、中学校を卒業した生徒は、小学校のときも学力は高かったと。そのあたりが、基本的には施策としては間違っていないところなわけですけれど、やっていることは。ただ、どうしても、先ほど教育長が言われたように、活用というところで劣ると。どちらかというところ極端にですね。そのあたりの授業の改善のところが一番、今必要な部分かなとは思っています。

- （大庭教育長） 私のほうからいいですか。

- （井上議長） はい。

- （大庭教育長） 確かに学年で、小学校のときに低かった子どもは、中学校行っても、やはり伸びが見られないということがあろうかと思うのですが、桂川町はそれぞれ今回の公的なテストだけではなくて、CRT、NRTというテストも実施をしております。そのときに、既に小学校

低学年のときから、その結果っていうのは学校が認識をしているわけですね。ですから、低学年のときに、こういう結果の子どもたちだから何をしなければならないかということをお当然すべきことなんですね。しかし、そこに課題があるというところにしっかりと手を入れていないという現状が、伸びが見られないというふうには捉えておる。ですから、もうこの子たちの現状というのは、学校のほうとしては十分把握をして、だから、こういうところに鍛えていかなければならない。それがそのままに通常の学習をずっと続けていくことによって伸びが見られない、弱点が克服できないままに次の学年、次の学年へと進んでいっているのではないかなというふうに分析しております。

- （井上議長）　ということは、ちょっと言い方が悪いですけども、先生の教え方に工夫が足りないのではないかとということですか。
- （大庭教育長）　大変そういった部分は大きいと思います。ですから、今、学習指導要領が変わって、今求められているものが、いわゆる主体的で、対話的で、深い学びを求めていく力が、そういった授業をしなければならないのですが、やはり学校の現状としては、まだ旧態依然というか、そういった授業が繰り返されているのではないかなというふうに思っています。
- （井上議長）　難しい。
- （原中企画財政課長）　いいですか。正答率のマイナス10ポイントとかいう差っていうのは、生徒さんのもうそのときの問題の相性とか、そういったものでは確実にないというぐらい明らかに示されるものなのか。こういった結果見て、先生方は、やはりこの成績どおり、こういった結果が出ているというふうには認識されているのかなというふうに思うのですけれども、なかなかこの結果が一概に、学力っていうことで言い切れない部分もあるのかなと思ったのですけれども、そこら辺の、10ポイントの差というのは、やっぱり確実な学力の差というのが、やっぱり出るものなのですか。
- （大庭教育長）　学力というのは、全て図りきれないですよ。ただ、この全国学力学習状況調査というのは、全国一斉に同じ問題なんです。同じ問題で、当然学習指導要領に基づいて授業が実施されてやっていることだからですね。だから、学習指導要領に基づいて授業を行っていれば、そんなに全国差が開かないとは思うんですね。だけど、そこに何があるのかっていうと、やはり子どもたちのそのときの状況もあるだろうし、周りの環境でもあるだろうし、教員の指導力もあるでしょうし、また家庭との関わり方、地域の関わり方、そして、そのことに対して行政がどんな手を打ってきたのかっていうところもあると思うんですね。ですから、私が最初に提起をしましたように、単なるこれは子どもの問題、学校だけの問題ではなく、家庭、地域、行政含めたところで、しっかりとこのことについて考えていかなければならないというふうに思ったところでございます。

○（井上議長） 他に。

いずれにしても、結果として出てきた数字ですから、その中身がどうこうあれ、それはきちんとやっぱり受けとめる必要があると思いますね。だから、あと、その受けとめ方として、私どもが第三者的に見る部分と、学校の先生が見られる角度、あるいは保護者が見られる角度は、それぞれ違うと思うのですけれども、何か共通する課題のようなものがあるとすれば、それはまだそれを、課題を解決するためにいろいろ努力せないかんとは思うんですよ。ただ、今の時点では、私のほうから見たら、どこに問題があって、どうすればそれが良くなるのかというような、そういう具体的な方法とかというのは、検討がつかないんですよ。だから、今日はこういう形での一つの問題提起だと思います。こういう現状があって、それから、この子どもたちの学力を少しでも伸ばしていく、そのために必要なことが、これから先の中でいろいろ気づくことがあれば、それをお互いに出し合いながら共有を進めていくということになろうかと思います。

○（皆越教育委員） 成績が比較的良い子と良くない子の大きな違いは、やっぱりテストの問題が返ってきたときに、何でこれ間違えたのだろう、どうして間違えたんだっていう子はやっぱり成績が良いですよ。そんなに気にしないというか、そこまで成績が良くない子というのは、最後に返ってきた成績表ですね。全体的に全ての評価のテストの結果が返ってきたときに、平均点が出ます。平均点と比べて、自分はちょっと下だつて。よく考え違いがやっぱりあるのですけれど、パーセンテージっていうのは、ものすごく大きな差があるにもかかわらず、ちょっと何%に入っているっていう勘違いをしやすいので、やっぱり成績が返ってきたときに、はっきり平均点がわかるっていうのは良いのかもしれないですけど、平均点そこそこで収まっているっていう感覚ですよ。学校内の平均点、ものすごく低いにもかかわらず、平均点と比べてしまう子どもたちっていうのは、外に比べれば、実は下の下だったりっていうレベルだったりしても、校内平均、真ん中ぐらいっていうふうに思って捉えて、まあまあよしっていう考えたりすることが、やっぱりあったりすると思うんですよ。なので、捉え方と考え方、成績を自分たちが眺めてどう捉えるか、テストの成績をどう捉えるか。例えば、数学にしても、問題の採点をしていきました。答えがプラスだったのにマイナスにしてしまいました。私自身は、それはすごい大きな間違いなんですけど、「ああ、マイナス」。単に間違えた、わかっているのに間違えたぐらいの感覚でしかないっていうのは、ものすごくその後の成績にかかわってくる感覚、捉え方っていうのがあると思うんですよ。その辺の、学校の先生とのやり取りで自分を知るといえるか、どうなのかっていうのを、本当の意味で自分のことをわかるっていうことができているかどうかっていうのは、ちょっと疑問と思います。

○（井上議長） そこは、やっぱり先生の指導のあり方というのものもあるでしょうね。

○（皆越教育委員） そうですね。ちょっと世情的にというか、割と、昔は私たちのところではそ

うでもなかったのに、何でもパーセンテージでっていうのが、前はそんな感覚はなかった気がするのだけれど、今、全てパーセンテージ、大体割合とかで聞くので、何か大差ないような気になってしまうということがあるのかなと思います。それこそ親御さんの中には、順位をはっきりせいと、名前出してしまえばいいのにとか言う方もいらっしゃいますけど、そういうのが良いのかどうかはちょっと私もわかりませんが。

- (井上議長) 昔、出しましたよね。
- (皆越教育委員) はいはい。上位は。
- (井上議長) 学校の中央廊下あたりにばっとね。個人の名前と点数。
- (皆越教育委員) 嘉穂中学なんかはばっと出してね。すいません。競争心っていうのは比較的、特に今の中学校3年生は、自分も子どもがいるので、かなり競争心が無い学年ですね。
- (井上議長) 競争心が無い。
- (皆越教育委員) 無いですね。その分トラブルはかなり、逆に全然無いのですけれど、友人関係とかですね。良いところはあるのですが、成績に関しては誰より頑張る人より高い点数を取ろうとかいう競争心も比較的無い学年なのですけれどね。
- (井上議長) 競争心というのは、何というか、自然と、一緒に学校に通う中で、自然とあの人には負けたくないとか、何かそういう雰囲気っていうか、学校の中にあるんでしょうね。
- (皆越教育委員) 学年によって、そうですね。
- (井上議長) やっぱり、ある学年と、無い学年と。
- (皆越教育委員) その差は大きいですね。
- (井上議長) そうですか。
- (皆越教育委員) そうというのが勉強に向いたり、文武に差があるのですけれど。
- (井上議長) それは、やっぱり持って生まれた子どもたちの体質から来ているものですよね。
- (皆越教育委員) そうですね。学年によって雰囲気っていうのはやっぱりありますね。一言、先生が声をかけたら、すぐに静かになるような学年っていうのは、もう小学校のときからそうだったりとかしますし。
- (河部教育委員) 一年一年の積み重ねですからね。
- (井上議長) うん。そういうことですね。
- (河部教育委員) 教育長の言われたように、この学年はちょっと学力が低いなど入ったときに、どれだけ学校の先生たちが認識をして、補填をした教育がなされるかにかかるといいます。そのまま上がっていきますから、結局は。
- (皆越教育委員) あと、東小学校はクラスが少数ですのであれですけど、桂川小の場合は、ここ何年か毎年クラスが替わるようになったので、それが、その前は2学年とかのクラス替えて

いう時期が続いていたのですけれど、今の中学1年生においては、変わるたびに人間関係でかなり揉めたというのが多かったのです。何か1学期始まって、さあ勉強だつて落ち着く前に、人間関係を落ち着かせるのに時間がかかって、先生のほうが手をかけられているという。ちょっと毎回クラスが変わるっていうのは、良いのか悪いのかというのはちょっと、人間関係を育むにおいてはどうなのかなというか。

- （井上議長） そこら辺は、もう学校の考え方でしょね。
- （大庭教育長） 何を重視するのかっていうところがあると思いますね。ですから、人間関係を、トラブルがもしあったら、例えば、従来のように2学年でクラス替えをしているときは、トラブルがあったときに、それを2年間持ちながらするというのと、もう1年でしっかり区切っていく、それで、新たな人間関係を作っていくという、やはりメリット、デメリットというのはやっぱり何かあるんですね。ですから、そのときの学校の状況によって、どのような形をとっていったかというところだろうと思いますね。
- （井上議長） そしたら、この議題については今後どんなふうに進めていきますか。
- （大庭教育長） よろしいですか。
- （井上議長） はい。
- （大庭教育長） 私もこれまではずっと、どちらかというと、健やかにたくましく育つ子どもというところを大体進めていきたいなと思っていたところなのですが、やはり先ほど言いましたように、子どもたちの進路をしっかりと保障していくという上では、今現在、高校入試も、前から高校入試自体が活用力を中心とした問題になっているのですよ。だから、今このときにそういった力をつけていかないと、自分たちが進みたいところにも進めなくなってしまう、そういう危機感を非常に持っています。そして、この活用力とかいうことに関しては、暗記とか一夜漬けでできるというものではないので、やはり長い時間をかけて身につくものであるから、単なる中3のときにしっかり頑張ればいいのかということだけでは非常に難しいと思うのです。ですから、小学校なら小学校のときに、この学年のときにどんな力をつけて、次の学年に渡さなくてはならないのか、そういった積み重ねの9年間で、15の春に子どもが希望する進路に進めるのではないかなというふうに思っているところなんです。ですから、これは、長い時間をかけるということは、それだけ家庭にも、社会にも、当然行政にも、どういう折々で、どういう施策を打たなくてはならないかということがあると、自分自身が考えますので、今回問題提起をさせていただいたところでございます。
- （井上議長） 問題提起していただいて、それを具体的に施策として出すと、提案すると。何かそういう具体的なものというのは、これからまた考えられるのですか。例えば、来年度予算に必要なそれを計上するとか、何か、それは、町独自の取り組みのようなことですか。

- （大庭教育長） だから、少なくとも今、少人数学級が配置をしていただいで、それを必ず継続をしていながら、そして、さらに学力アップの町雇用の講師もされてありますので、やはりそういうところを本当に有効活用できるようなことをしていかなければならないというふうに思っています。内容面に関しては、今、県の教育委員会の重点課題という研究指定を受けておりますので、内容面については、それは幼稚園から中学校まで、この12年間、12年間を見据えて子どもたちをどう育てていくか。そういったところも進めていきたいというふうに見ております。
- （河部教育委員） 今いろんな形でもう施策を行っておりますが、是非、教職員の人材の育成のところをもう少し強化をしないと、ちょっとどこかで学力は上がらないです。もう少し学校の先生たちが危機的な意識を持って、これに取り組まないと、学力向上には結びつかないと思います。
- （井上議長） この質問を指摘されるところでもあるのですけれども。
- （大庭教育長） よろしいですか。何よりも、教職という仕事が非常に夢のある、希望のある職業になるような形にしていかなければならないというふうに。現に、次年度採用の小学校教員の採用競争倍率が1.2倍。
- （井上議長） 1.2倍。
- （大庭教育長） 1.2倍という現状であります。
- （井上議長） 1.2倍。
- （大庭教育長） これは、一つは、採用数が増えたということと、それに伴って受験生が増えればそこまでないのですが、採用数が増えたけれども受験者が少なくなっていると、こういう現状でございます。やはりこう言ったらあれですが、3倍を切ると非常に人材としても厳しいような状況で、今学校のほうでは、そういった若い先生方が、若年教師が学校の中に多く増えていますので、授業も当然ながら、その他もろもろ教師としての力量をつけていくという、そういったOJTも行っているという現状でありますので、やはり教師が力をつけていくっていうのは、子どもと実際に授業をしていく、あわせて研修をしていく、こういったことをしていくことが、やはり今申された教師力の向上っていうところになるのではないかなと思っております。
- （井上議長） この議題については、今後も継続して協議していくということをお願いしたいと思えます。
- それでは、また後で伺いますので、一応次に進めたいと思えます。
- 2番目の教育の状況についてなど重点的に講ずべき施策について。これは課長のほうから。
- （北原学校教育課長） 私のほうから。今1番の協議の中でもありましたように、少人数措置につきましては、平成23年から町の単費講師を配置しまして、少人数学級の取り組みを進めております。効果としては、授業や生活指導等において、子どもたちに対してきめ細かな対応がとれていると。成績も結果についてはいろいろと捉え方はあるのですが、少なくともやはりきめ細

かな対応はできている、あとは有効活用という、教育長のほうも言われましたが、そういう面が課題になってくるのかなと思っております。

本年度の5月1日調査における令和元年度の児童生徒数について、まず状況の報告をいたします。桂川小学校については563名で、昨年度と比べますと14名のプラスというふうになっております。クラスとしては26クラスです。そのうち、特別支援、知的・情緒を合わせて4クラスが含まれております。今回の少人数の措置につきましては、町費により6名の町講師を全学年に配置しているという状況でございます。それから、東小学校ですが、東小学校は112名で、前年度比でいきますと5名プラス。クラス数は昨年と同じ7クラスで、うち支援学級、知的1を含んでおります。東につきましては、もう少人数措置の必要がない学校ですので、町単費での少人数講師の対応の講師は配置しておりません。中学校でございますが、308名ということで、昨年度と比べますと1名の減となっております。13クラスで、うち特別支援、知的学級1、情緒学級1ということですが、今回、中学校につきましては、少人数学級の実現のために、2名の講師を1年生と3年生に配置しておるところでございます。3校を合わせますと983名ということで、前年度と比べますと18名の増という状況でございます。今年度につきましては、特に桂川小につきましては、6名の配置ということで、各学年に配置ということですから、最大限の配置がされているという状況でございます。

それから、他にも学力アップ推進講師、これを町の単費にて、平成26年度より配置しておるところでございます。状況としましては、小学校2校それぞれに1名ずつ、週12時間の講師を配置、中学校につきましては週16時間の講師を配置しておるところでございます。

また、特別支援関係につきましては、近年、特別支援関係、また、いわゆる配慮の必要な子というのは年々増加の傾向があります。今年度の配置としましては、特別教育支援の支援員を3名と介助員を4名ということで、学校別にいきますと、桂川小学校に3名の介助員と、東小学校に介助員1名を配置している状況でございます。

それから、ICT関係になりますが、パソコン指導助手の配置としまして、本年度も桂川小、東小に1名を支援員として配置して、1名の方が東小と桂川小を掛け持っているという状況でございます。

それから、中学校につきましては、中学校のサポート教室の設置ということで、平成17年9月からサポート教室を町の単費で配置しております。サポート教室は、学校に登校することはできても普通学級で学習することが厳しいというような生徒のために、少人数対応で学習支援や適応相談を行っているということで、これは、元桂川小を教頭されてあった方を、現在教員として配置しているところでございます。

それから、学校教育指導主幹、教育委員会のほうに1名配置ということで、本年度で10年目の

取り組みというふうになります。本年度は、昨年度までの森指導主幹に変わりました、本年度より石井主幹が配置されております。

それから、地域と学校を結ぶ学校支援地域本部を平成27年10月に立ち上げまして、現在、教育委員会のほうに地域支援のコーディネーターを1名配置しておるところでございます。

また、不登校等の対応といたしまして、スクールソーシャルワーカーの配置、これを町の単費による週8時間の配置を実施しております。

また、その他の教育委員会の取り組み、教育関係の整備として、土曜学習教室の取り組みを実施しております。これにつきましては、桂川町の児童生徒の学習機会の提供、それから、地域人材を活用した事業を推進すること、学力の向上を図るということで、小学校5、6年生、東小は4年生までを対象とし、中学校1年から3年生までを対象として実施しているところでございます。

以上につきましては、ソフト面についてでございますが、ハード面につきましては、一昨年度、平成30年度において、桂川中学校のトイレ大規模改修、それから、桂川幼稚園のエアコン設置をいたしました。そして、本年度におきましては、エアコンにつきましては、各小中学校にエアコンの設置、これにつきましては8月末をもって竣工、現在もう運用しているところでございます。また、現在、桂川小学校、東小学校のトイレの大規模改修を本年度中に完了させる予定ということで、ソフト、ハード面において教育環境の整備につきましては、以上のような形での配置を本年度しております。

以上、雑駁ではございますが、説明を終わります。

- （井上議長） 少人数学級の担任に配置している講師、桂川小学校は何人と言った。
- （北原学校教育課長） 6名です。
- （井上議長） 6名。各学年に1人いるの。
- （北原学校教育課長） 各学年に1人という、になります。
- （井上議長） ただいま教育の状況整備など重点的に講ずべき施策ということで、事務局のほうから説明がありました。この件につきまして、皆さんのほうから御意見等ございましたら、お願いしたいと思います。
- （河部教育委員） 私のほうから一点。
- （井上議長） はい。
- （河部教育委員） ありがたいことに、小学校、中学校ともに冷暖房完備、またはトイレの改修と、まことにありがとうございます。また、多額なICTの環境の整備ですけれども、大変な巨額な費用がかかります。しかし、これは桂川町の教育、魅力ある教育を創るためには、やはりどうしても先進的な教育環境を支援していかなければいけないと。そのあたりは町長も十分、十二分

に認識してあると思いますけども、ぜひそのあたり、Wi-Fiの環境の整備など、タブレットも含めたところの整備もぜひ進めていただきたいと、そのように思っております。

- (井上議長) この件については、現状としてはどうなっていますか。
- (北原学校教育課長) 現状としては、一部無線LANとか、また、タブレットも数台は配置しておるところでございます。ICT関係につきましては、当然、今後進めていく必要があるのですけれども、これまでもやはりそれを使う教員の方の、やはり研修であったり、実際これまで電子黒板を配置しても、なかなか利用されていないという実情もありましたので、ようやく現在有効活用できているような状況です。ICTはICTで当然進めていくこととは思いますが、それを今度は使いこなしていく先生方の研修も必要かなというふうには考えております。
- (井上議長) わかりました。その他にいかがでしょう。
- (皆越教育委員) すいません、土曜学習の件ですが、これは希望している子どもたちがもう少し、数がいたら良いなという状況であると思うのですが。塾に行かれている場合、ほとんどの子は多分土曜学習には行ってないのですよね。塾に行っていない、行けないという子たちに本当は来てほしいのだけれども、今のところ、テキスト代を支払っているはずなのですが、テキストを負担していただくとかいうのはできないのでしょうか。もう完全に無料で土曜学習に参加できるような状況はできないのでしょうか。
- (新宮教育委員) 私も本当に思うのですけれど、せっかくの土曜学習なのに、本当に少ないんですよね。もったいないと思います。
- (井上議長) 少ないって、少ない理由の一つが、そのドリルということになるのですか。
- (皆越教育委員) 少なくとも費用が掛かる掛からないっていうのは、今、親たちの中では大きな選択だとは思いますが。
- (井上議長) まあ当然意見としてお聞きはしますけれども、やっぱり現実問題、先ほどから事務局のほうから話していましたが、いろんな形で施策を打ちながら、やっぱり対応としては、かなりやっているつもりなのですよね。そういう中で、先ほどの学力向上も含めて、そういった施策がきちんと生かされているかどうか、そういったことについては、やっぱりどこかの時点でチェックというか、する必要はあるかなとは思いますが。だから、そういう中で、先ほど言われたような形で、果たしてそれがネックだと。それが無くなれば、もうどんどん参加しますよということなのか、もっと別のところに、土曜学習の別のところに子どもたちが集まらない理由があるのか、そこら辺は具体的に点検する必要があると思いますけどね。
- (皆越教育委員) もうちょっと勉強できる環境になったら良いなっていう子どもの保護者さんが、回ってきたプリントで御案内が来たところで、お金が掛かるからいいっていう選択をとられる親御さんもいらっしゃるの、そういう……。子どもたちにとっては、勉強する機会を逃して

しまうっていうことで……

- （井上議長） 事務局のほうでも、ちょっと検討してみてください。
- （北原学校教育課長） そうですね。土学、土曜学習教室については、今みたいな形で、確かに少なくなっているのは現状ですので、ただ、そこは、本当にどこに原因があるのかというのは、きちんと検証をした機会がありませんので、そこは是非やりたいと思っております。
- （井上議長） 一つには、私もちょっと詳しくはわからないからあれですけど、土曜学習という形と、また別の形、そういったものも選択肢の中には入るわけですよ。
- （北原学校教育課長） そうですね。
- （井上議長） だから、よその学校では土曜学習はやってないけれども、別の形でやっているとか、そういった話も聞くし、土曜学習というものが絶対的なものじゃないということも言えるわけで。
- （皆越教育委員） もちろんそうですね。
- （井上議長） ただ、効果は上がっているというふうに、ちょっと思っていたんですけどね。
- （新宮教育委員） 何人かしか来てないです。
- （北原学校教育課長） これまでの中で、一つ傾向としてあったのが、嘉穂高校の附属ができましたよね。あのときに、当時の5年生がぐっと増えたんですね。今、それがだんだんちょっと減少してきているということで、私、実際にこの土曜学習教室に行って、子どもの話なんか聞いたりと、様子なんかを見ながら、確かに意見があったように、お金の面も当然それもあるかと思うのですが、もう一つは、やっぱり家庭の意識というのも非常に大きいのかなというふうには思いましたね。あとは、結局、ある程度勉強ができる子が来て、本当にこの子、来たほうが良いよねという子がなかなか来ていないというような現状もあるなというふうには感じました。それはお金の面もあると思いますけども、意識の問題もあるのかなというふうには思いましたね。
- （井上議長） それは永遠のテーマ。
- （新宮教育委員） 考えなきゃいけないところですね。せつかくあるのにですね……
- （井上議長） だから、タダなら来るという人はおるかもしれないけども。よく言われるように、水を飲ませるためにロバを川まで連れて行くことはできるけれども、水を飲むか飲まんかはロバが決めると。勉強しなさい、勉強しなさいと幾ら言うても、最終的にするかしないかはね。
2番の件について、また後でまとめたときをお願いします。
それでは、次に進みたいと思います。
3番目の児童生徒等の生命・身体の保護と緊急の場合に講ずべき措置について、説明をお願いします。
- （北原学校教育課長） はい。3番目の児童生徒の生命・身体の保護と緊急の場合についてとい

うことで、毎回この中で、いじめの件数であったりとか、不登校の分についての説明をしているところでございます。今回、昨年度についてなのですが、平成30年度におけるいじめの認知件数ということで、まず報告をしたいと思えます。

30年度につきましては、桂川小学校については1件です。これは、男子児童間による暴力によるいじめということでした。教員のほうが教室の雰囲気、すぐに気づきまして、いろいろ聞き取りの中で発覚したのですが、最終的には、この分につきましては解決をして、本児童についても元気に登校してきたというような状況です。東小学校については1件ありまして、これも男子児童間で、いわゆる嫌なことを言われたり、嫌なことをされたりということで、これは被害者側の祖母のほうから、どうも友達とうまくいってないということで、家庭訪問をして、これがわかったという事案でございます。これにつきましても、最終的には解決をしております。

中学校につきましては、3件です。まずは、男子生徒による女子生徒への冷やか・からかいというものでした。1年生女子生徒に対して男子生徒が5名ということで、嫌なあだ名をつけてからかったという内容でした。それから、2件目は、部活動で上級生5名が下級生の5名に対して、日常的に暴力を振るっていたという内容で、これは、学校のほうで実施しましたいじめアンケートで発覚したものでございます。それから、最後、これは男子生徒間で嫌なことを言われたということで、これについても家族、祖母が来校されて、担任のほうに相談したことで発覚したという事案でございます。教室で嫌なことを言われたり、いわゆる携帯電話ですね、LINEに書き込みをされたという内容でございました。これは、加害者側としては、じゃれ合いの中で使った言葉というふうな認識だったのですけれども、された相手側にしてみたら、とても嫌な言葉であったということで、いじめとしてこれも上がってきております。

いじめの認知につきましては、平成27年度の文科省の通知により、些細な事案についても報告するということになりました。これにより、いじめの件数としては全国的にも増えてきておりますが、文部科学省としてもこれまでの見解と変わって、いじめの認知件数が多い学校については、むしろいじめを初期段階のものも含めて積極的に認知し、その解消に向けた取り組みのスタートラインに立っているというような肯定的な評価をするようになってきております。このことから、今後につきましても、初期段階のいじめや、ごく短期間のうちに解消したいじめ事案についても、しっかりとアンテナを張って、見逃すことのないように対応しているというような状況でございます。

また、不登校、長期欠席についてでございますが、昨年度の不登校を含む長期欠席につきましては、桂川小学校が7名、29年度と比べますと2名の減、東小学校で1名、これも29年度と比べますと1名の減、中学校が18名、前年度と比べまして、6名の減ということで、合計で26名でした。前年度、29年度との比較でいきますと、マイナス9名ということでございます。

不登校につきましては、一つの定義がありまして、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因、背景により児童生徒が登校しない、あるいは、したくてもできない状況にあるものというふうに定義しております。ただし、病気とか経済的理由によるものは不登校からは除きますが、いわゆる長欠という形で報告は学校のほうからは受けております。

なお、ここ数年の動向としまして、平成30年が26名でしたが、29年度、28年度は35名という状況でした。27年度が25名、その前の年が36名ということで、毎年20数名以上は必ず長欠・不登校がいるというような状況でございます。

スクールソーシャルワーカーを含め、対応はしておるところです。30年度、数字だけでいきますと少なくともはなっているのですが、やはり学年を構成しているメンバーも年によって違ってきますので、対応、対策が進んでいるということだけではなく、学年の構成要因によるものも考えられると思います。

以上になります。

- （井上議長） ただいま児童生徒の生命・身体の保護と緊急の場合に対する措置ということで説明がございました。この件について御意見等ございますか。

さっきの説明の中で、いじめの部分が桂川中学校、5名の男子生徒の日常的な暴力、これはどういう状況ですか。

- （北原学校教育課長） これはもう、いわゆるもう部活動……。

- （井上議長） 同じ部活動。

- （北原学校教育課長） はい。同じ部活の中になります。同じ部活の中で、昨年8月頃から日常的にあったということで、そのときに、10月に実施したいじめアンケートに、1年生がこのことを書いて発覚したというような案件でございました。

- （井上議長） 今は落ち着いている。

- （北原学校教育課長） その後、もうそれは落ち着きました。これ去年のことなんですけど、一応落ち着いて、最終的には解決に至って、現在はまた落ち着いてはいる状況ではございます。

- （井上議長） 皆さんのほうから。

- （大庭教育長） 今、不登校が非常に、現況はあっているといいつつも、全校いまだに多いような状況であります。それこそ昔は遊び非行型といって、もう学校に行かないで、もうガーッと遊びに出たりするような不登校が多かったのですが、今のこの状況は、無気力とか、逃避とか、そういった形での不登校というふうなところが非常に多くあるところになっています。ですから、やはり専門家または医療機関、当然家庭、学校としっかりと連携を取りながら、そこら辺の子どもたちの居場所づくりとか、そういったところをしっかりとしていく必要があるなというふうに思っています。やはり担任だけではなくて、これもまた学力とも何か繋がりそうで嫌なので

すが、学校全体でやっぱり多くを見守って、どこにこの子が、学校のどこにいれば自分の居場所として考えられるのか、そのような形で今の、それこそいろんなところと連携をしていく必要があるなというふうに思っています。

○（井上議長） ちょっと質問いいですか。

○（大庭教育長） はい。

○（井上議長） 私もよくわからんのは、今までの話の内容、大体、例えば、4月から新しい年度が始まって、来年の3月までありますが、それを4月からずっと1学期終わって、2学期、3学期と移っていきますので、不登校の数というのは大体増えていきますよね。

○（北原学校教育課長） 増えていきますね。

○（井上議長） 減っていくことはないよね。

○（北原学校教育課長） 一つの定義に……。

○（井上議長） いやいや、もう定義はいいから。もう定義はいいとですよ。30日がどうか、そういうことじゃなくて。例えば、不登校という、そういう状態の子どもたちをきちんと学校へ通えるように改善できた例、何かそういったものは何かあるのでしょうか。

○（北原学校教育課長） それは、やっぱり少なからずありますね。やはりそういう状況があったのだけれども、その後、やはり学校の先生の対応によって、例えば……。

○（井上議長） いや、全国的な話じゃなくて、桂川町の話で。

○（北原学校教育課長） それは、そういうケースはやっぱりあります。

○（井上議長） あるの。

○（北原学校教育課長） はい。

○（井上議長） そしたら、そういったものは、何かもう少し発信できないのかな。

○（北原学校教育課長） こういう形になりましたとか……。

○（井上議長） いや、要するに、良い方向へ向かったというところとか、何かこういう数字とかを見ているときに、いつも、それは不登校は一人でもおったら問題かもしれないけれども、数の問題でね、もうだんだん学期を追うごとに増えていきますということで、そのイメージっていうのは、何となくイメージ的に悪いし、大体その間、現場はどういうしていたのかみたいな気持ちになってしまうと思う。だから、努力した成果として、例えばA君なら、A君の場合はこんなふうに改善というか、学校に来られるようになりましたよみたいな、やっぱりそういったものを発信というか、できないのかね。実際は不登校の子どもを抱えている保護者は、本当に頭が痛いと思うとよ。何とかならんやろかちゅう、もうちょっと。でも、何ともならん。現実的に何ともならんという、そこは諦めるだけなのか。そうじゃない、やっぱり学校、家庭、地域、協力すれば、こういうふうに良くなるケースもあるのですよということを知らせてやる必要はあるような

気がするのですよね。

- （北原学校教育課長）　そうですね。今町長がおっしゃるように、確かに……。
- （井上議長）　もちろん個人の了解も要るし、早々簡単に情報だけ流せば良いということじゃない。もちろん基本的な配慮というのは必要だけれども、でも、やっぱり立ち直っていく姿とかと
いいですか、物すごく力強いものがあると思うんですよね。
- （北原学校教育課長）　そうですね。ちょっとそちらのほうに視点を当ててというふうに、不登校問題をなかなかこういう場でも、ほかの場でも報告、発信することは無かったのですがね。
今おっしゃるような点というのは、確かに大事なことかなというふうに私も思いますね。
- （井上議長）　と思います。何かそういう希望がないと、なかなか入っていけない話だからね。
- （畠中教育委員）　すいません。今、ソーシャルワーカーの方を8時間置いていただいているのですが、予約が何か取りにくい状況になってきているみたいなんです。今まではもう結構、
毎週ぐらいに1時間とってもらってお話聞いてもらっていたのですが、最近は何か2週間に1回とか、
何か3週間に1回とか、ちょっと他にも受ける方がいっぱい居るという状況で、ソーシャルワーカーの先生に。
- （井上議長）　そう。
- （畠中教育委員）　はい。
- （井上議長）　あれですか。予約みたいにとれないと。
- （畠中教育委員）　そうです。
- （井上議長）　という……
- （畠中教育委員）　はい。スクールソーシャルワーカーの先生のほうに。ちょっといっぱいになってきているみたいなので、でも、やっぱり必要なことなのですよね。やっぱり学校の先生とか、
学校の友だちだと解決できない問題っていうのをやっぱり本人たちは抱えていて、第三者の先生に話を、
親でもだめなんですよ、ああいうときは。第三者の先生に客観的な目で見ってもらって話を聞いてもらうって
いうだけでも、結構ほっとするとか、すっきりするとか。それで、何か先生がお忙しくなっているみたいなので、
ちょっとお話聞いてもらえる時間が短くなってきているというのは、心配なんですよ。なぜなら、ケアを受ける時間、話を聞いてもらう時間を
楽しみにしているところが。今日はカウンセリングがあるから学校ちゃんと行こう、そういうこともある。うちに限って
かもしれませんが、少なからずありますね。なので、ちょっとそういう時間がちょっと短くなってしまふことに、
すごく懸念を抱いていて。
- （井上議長）　そこら辺は、まず実態を確認してください。
- （北原学校教育課長）　わかりました。
- （畠中教育委員）　中学で不登校で、例えば、いろいろ葛藤があつてつということがあつても、

高校に入って無事に普通の生活をしている方もいらっしゃるのです。

- （井上議長） そういうの聞くもんね。
- （畠中教育委員） はい。その数だけで、この14人の、やっぱりその子がどういう葛藤があって、今でそんな、そういう状況やけど、何か高校に行ったら普通にこうやって、普通に生活している方がこんだけいらっしゃいますからっていうデータを示せば。中学校は3年間ですよ。
- （井上議長） 僕もそこら辺よくわからんとです。ただ、かなり中学、高校、大学、あるいは社会人とあるのですけれども、最終的に社会人になって、ある意味成功をおさめた方なんてのは、振り返ったときに、実は、僕は中学時代に比べたら、高校に全然行かなかったという話を聞きますよね。そうしたときに、今言われるように、もうそのとおりで、不登校、学校に行けなかったということ自体がそんなに大きな、その人にとって課題じゃないっていうのが、ちょっと意地悪な見方で、そういう人っていうのは、私は本当に一握りの人やないかなと思うのですよ。やっぱり多くの子どもたちはそれを引きずって、やっぱり悩み、苦しんでいるのではないかなと。たまたまそういう人たちが出てきて、メッセージを送ることによって勇気づける、それは良いけれども、だから学校に行かなくていいんだという、そういうふうを受け取られるのはどうかなと思って心配なのですけどね。
- （皆越教育委員） 比較的そのケースっていうのは、今は、良い意味で情報化社会でいろんな、こういう子がいました、でも自分はこういう体験があったけどこうなりましたっていうのは、御自分が発信してある方もたくさんいらっしゃるのを目にすることはできるので、悩んでいる親御さんっていうのは、そういったのをたくさん目にしながら、じゃあ、うちの子はどうしようっていうことを考えてらっしゃるとは思うのですよね。実際は、その子によって違いますし、学校に行けなかったっていうことで、次の段階というか、次に踏めないっていうふうを考える人は最近もう少なく、別の方法で違う学校に行ってみるとかっていうのを、手だてをしている方が増えたから、あんまり公立の中学校に行けてないからっていうことで、もう悲観的になる人は前よりは減ったと思いますね。
- （井上議長） ちょっとそこら辺、私、遅れとるとかもしれん。
- （皆越教育委員） いえいえ。
- （畠中教育委員） でも、やっぱり言葉と数字が出ると、どうしてもやっぱりマイナスなイメージではあるけれども、でも、多分恐らく日本全国、全国的に何かこういう傾向でもあるし、でも、やっぱり今こういう現状だけど、先行けば何とかなっているっていうのも、ちょっとわかっていたらと思います。
- （皆越教育委員） 桂川は、ピザ屋さんしてあるところ知っています。
- （井上議長） ピザ屋さん。

- （皆越教育委員） ピザ屋。
- （畠中教育委員） 一步。
- （皆越教育委員） 一步で働いてある方が……。
- （畠中教育委員） ほたるの里の近くで、あそこからちょっと入ったところに何かある……。
- （皆越教育委員） 何か心の研究とか、そういうのをして、そこがピザ窯されてて、お店もし始めて、そこに働いている方が、引きこもりを何年もされていた方とかが、今ちょっと頑張ってるっておられるという。
- （井上議長） あそこは、今言ったように、いわゆる障がい児者の方の……今はどうなんでしょう。
- （皆越教育委員） またちょっと、形は変えて。
- （井上議長） 前、心のクリニックか、何かされて……
- （皆越教育委員） それはそれで。はい。それはそれでやられていて、お店をやられているのも、そういう、一旦家から出られなくなって引きこもりをされていた方とか、社会に出られなくなった方っていうのを、一緒にケアをしながら、お店をやっているという形でやられていて、そういう人たちも発信っていう形で、自分たちの体験をホームページで発信して。
- （井上議長） ピザを売ってあるのですか。
- （皆越教育委員） ピザ。はい。作って、すごくおいしいですよ。
- （新宮教育委員） 小学校・中学校で学校に行けなかった生徒たちが、卒業した後もずっと、大人になっても引きこもっているというケースは、桂川にはあるのですか。
- （井上議長） あると思いますよ。
- （新宮教育委員） どれぐらいおられるか。
- （井上議長） どれぐらいでしょうかね。ちょっと正確な数とかはわかりませんけれども。
- （皆越教育委員） それはちょっとやっぱり……。実際私の知っている方で、もう40ぐらいになるのでしょうかね。一旦は社会に出たものの、仕事につける、それなりの知識はちゃんと学校で得たものの……
- （新宮教育委員） それは何か、何としてもそれは避けたいですよ。大事な人生を簡単に全部、大事な一番こう何ですかね、学校の段階で克服できていたら良かったのになって後で思わないようにしてあげられたら良いかと、そのように思います。さっき言われたように、高校に入ったら普通に行けるよっていう子は、そこは安心、ある意味安心なんですけど、そうじゃない子たちに……。
- （井上議長） 人によっていろいろあるものなんですけども、私が知っている人は、高校に入ってからなのですよ。中学時代までは物すごく元気で、スポーツマンで、でも、高校に入ってから

ったのかわからないのですが、高校に入って2年生になって……だから、人それぞれですよ。

○（皆越教育委員） そうですね。

でも、やっぱり対人関係が原因というのを非常によく聞くので、人の目につくようなところに仕事はまず考えられないのと、足を一步外に出すのが難しいという状況なので、なかなか仕事を探すのもですね。今だったらIT関係、それこそITとか、人の目につかない職種がもし町とかにあったとしてですよ。そういう形で、障がいの方でそういう仕事ができればってというのは。だから、才能は持っていられたりですね。

○（井上議長） そうです。

○（皆越教育委員） するわけですね。

○（井上議長） そのとおりです。

○（新宮教育委員） ちょっと、今だったら発達障害に入るのかなっていう。IQは高いけども、どうしても社会性というか、何か対人関係をうまくいかないっていう、そういう人たちはたくさんおられるかなと思って。九大まで出た人が就職できなくてっていうのを聞いたことあるんですけども、実際、本当にお寿司屋さんの出前でもできなかったです、その方は。うまくいかなかったんです。一人一人全然違うので。

○（畠中教育委員） 全然違うとは思う。

○（新宮教育委員） 一人一人の対応とても大事だし、少人数かもしれないけど、一人一人がとても大事なので、さっき言われたように、ソーシャルワーカーさん少ないのであれば、そこをちょっと補充してくださるようなところあれば良いなと思っています。週8時間ですよ。

○（畠中教育委員） 8時間。

○（新宮教育委員） ちょっと少ないですよ、週8時間は。

○（皆越教育委員） 週8時間でも難しくなっているという状況ですよ。

○（畠中教育委員） 2週間に1回くらい。

○（井上議長） そういう本当に波長の合う、そういうソーシャルワーカーの人がいるかどうかという。

○（新宮教育委員） そうですね。

○（井上議長） この人でないとだめっということもあるですよ。

○（新宮教育委員） だから、もうほんとこの人に出会って、自分は本当に180度変わったっていう方がたくさんいらっしゃるから、出会って大事ですよ。

○（井上議長） ですよ。数多ければ良いという問題じゃないですよ。

○（皆越教育委員） ですよ。

○（新宮教育委員） そうなんですよ。

- （畠中教育委員） 親としては、やっぱりできる限りの支援がしたいなと思っているので。
- （井上議長） それは当然ですよ。
- （畠中教育委員） そうなんです。
- （井上議長） そういうのは当然ありますから。
- （畠中教育委員） はい。そういう感じで、できる……。この人が元気になれるのだったら何でもしたいなと思うんで、それだけです。
- （新宮教育委員） 1週間に1回じゃね。
- （畠中教育委員） ちょっとね。
- （新宮教育委員） 人の心が保てない。
- （井上議長） はい。ちょっときりが無いと思いますけれども、またこれからの課題として捉えていきたいと思います。

今まで1、2、3で結構それぞれ議論等をお願いしましたけれども、全体を通して何かありましたら。

じゃあ、ちょっと私のほうから4番のその他の項ということで、これはもう問題提起みたいになりますけれども、今、学校の施設関係、それから保育所・幼稚園、そういう町の施設がありますけれども、将来のそういう教育環境の整備といいますか、施設関係も含めたところで、どうあるべきかというのを当然のことながら考えていかなければいけない状況がある。今の段階では全くの、何といいますか、公的な形で協議したいものはありません。これからやっていかなければいけないと思うのですけれども、その最初の会議がここだと思っておりますので、総合教育会議の中で皆さん方と協議をしながら、いろいろな取り組みが必要かと思っておりますので、これからの課題にしていきたいと思っております。

具体的に言えば、よその事例もいっぱいありますけれども、桂川町ぐらいの規模だったら、例えば、今、小学校2校ありますけれども、学校統合、あるいは中学校まで入れるなら小中一貫、そういったことも一つ考えられます。保育所については、民間委託ということもありますし、幼稚園についても、これから先の保育所と幼稚園の関わり方によって、十分また対応の仕方が変わってくるのかなというような気がしています。一度に決めるみたいなことは、それはもうとても難しいところかなと思いますけれども、やっぱりある意味、町民の中に意見を聞きながら進めていく必要があると考えておりますので、そういう課題があるということ、まず皆さん方に御理解していただきたい。ただ、先ほど言いましたように、まだそういう具体的な協議の場というのは、別には設けておりませんので、今の段階では問題提起をして、個人的な感想を言っていたいでも結構ですから、出していただければということで提起します。

それで、いわゆる町の総合計画マスタープランっていうのがあるので、これが来年

度までです。来年度までが第5次総合計画の期間です。だから、再来年になると第6次総合計画が新しく出ていきますので、総合計画そのものをつくる、策定する必要が……いわゆる策定する中に、そういった項目も当然出てくると思いますから、どういう方向性を示せるかですね。それをやっぱり検討する必要があると思います。

○（**畠中教育委員**） 例えばですけども、町長さんは小中一貫校にしたいなとかいう御意向はおありですか。

○（**井上議長**） 私なりにいろんな方に話を聞いてみるんですね。実際それぞれが、それをやっている人に。そこの校長先生した人もいらっしゃるれば、行政の立場で進めた人、意見を聞くのですけれども、評価はばらばらなのですよ。必ず良いとか、必ず悪いとかというのは出てこないですね。良い面もあれば、悪い面もある。だから、それは私が聞いた範囲の話ですけれども、それをもっとやっぱり詰めていく必要があると思うのですけれども、今の段階ではそういう課題があるというだけで、こうしたら良いのではないかという具体的なプランもありません。それと、もう一つは、私どもが協議をする場合には、より現実的な立場で協議をする必要があると思うのですよ。夢物語みたいに何かこう、本当に立派な施設で、土地は広い方が良い、学校は大きいが良い、ICTも含めて何もかも完備されれば良いというような、そういう理想論は理想論でいいでしょう。ただ、より具体的なもの、具体的な計画性を押すとするなら、より現実的に、場所の問題も含めて考える必要があるというふうに思っていますけれども。だから、協議しながらも時間がかかると思うのです。協議の途中で、例えば、例えばですよ。協議の途中で、ここはやっぱり一回、例えばの話、PTAの皆さんが話聞いたら良いよねとか、あるいは、町民の皆さんがアンケートとったら良いよね、そういったことも出てくると思うのですよ。そういったことも実際に実施しながら進めていったらいいとは思っていますよ。

○（**皆越教育委員**） 私はちょっと、桂川出身ではないので、聞きかじった話では、やっぱり小中一貫とかいう話題になりましたら、それぞれでやっぱ小学校に携わっている方たちの思いがあったりして、それを一つにするっていうものが、なかなか融合するのが難しいようには伺っているのですが、小中一貫校っていても形がいろいろな形であるところはやられて、ただ同じ敷地にあるけど、別のものみたいな感じでやられているところもありますし、いろんなパターンが。全く同じように行事をやられているところもありますし、先生方の話にしても、いろいろやり方が違うとは思いますが、やっぱりすぐそばにあるっていうところに小学校と中学校ってあることでは、やっぱ先生方の会議ですよ。保護者の活動などを考えても、小学校と中学校の先生方の連携っていうのがあるのがやっぱり望ましいというか、繋がっている部分がですね。だから、できれば、ちょっと今、東がちょっと遠いような感じにはなっていますが、隣接したところであって、お互いに同じ一緒に共通して行えるような行事とかいうのも、できるものならあってほし

いし、まずそれを今回は含めて、小学校から中学校に上がるに当たって、先生方の連携ってというのが取れる形の小中一貫を造ってほしいなと思いますよね。

○(井上議長) 一つのこれまでの経過の中で私が知っているのは、田んぼの関係もある東小学校、多いときは1,200人ぐらい子どもがいて、それは、炭鉱閉山に伴って減ってきて、そして、途中でもう子どもたちの数が少ないから、いわゆる行政区で桂川小学校の範囲に入っている行政区の子ども、これを一部東小学校に通うようにできないかという、そういう話が持ち上がったことがあります。それを受けて、これも例えばの話ですけども、東小学校に近いということであれば、例えば、吉隈の皆さんはどうかというような話とか、要するに、できるだけ東小学校に近い行政区の皆さんに桂川小学校から東小に変わってもらおうという話を持ちかけたことがあるんです。そしたら、もう完全にノーです。完全に。その当時です。その当時。親が通った小学校に子どもが通う、これは当たり前のことだ、そういう時代だったものですから、これはもう全く話にならない。だから、もう途中で折れてしまってますね。

○(皆越教育委員) 年数がたてばですね。じゃあ、今、同じ問いをしたら、どんな回答がというのは……。

○(井上議長) それは変わりますよね。ただ、今の状況の中で、ちょっとそれはやりにくいと思うんです。東小学校をそのままずっと継続しておくという前提であればね。前提があれば、それは可能かもしれない。だから、さっき言ったそういう統合とか、小中一貫とか、そこら辺の考え方がきちっと整理ができてないと、中途半端な形で問うことは難しいと思いますけどね。

○(河部教育委員) 基本的に私の考えは、平成29年6月のこの総合教育会議で一度申し上げましたけどね。基本的には、私は学校施設等の長寿命化、改修計画を進めるべきだと。申しますのは、特に今、クーラーの設置もしましたし、トイレも改修しましたよね。あとは、もう外見のところの塗装、あとは内部のところ、それをすれば、当面はもうこれで20年近くいけるのではないかなと。それと、町長が示されておりますように、地域とともにある学校というところを考えますと、やはり東小学校のところは……。

○(井上議長) やっぱり東小学校は……

○(河部教育委員) 子ども……。昔ながらの方がまだまだおられますので。

○(皆越教育委員) そういう意味合いでは、ある意味、桂川東小学校の立ち位置というのがセカンドスクールのって言うのですか。例えば、東小学校にも来たいという子が入れるようになったら良いなとか、ほかの人の話とか、やっぱり東に行きたいのに、校区が違うから行けないっていう、逆にそう思われている方もいらしたりして、その選択は自由じゃないのかなという、桂川町で。

○(畠中教育委員) かえって逆もあるのです。東小校区にいるけれども、中学になると、やっぱ

りギャップ。人数がやっぱり圧倒的に違うので、中1ギャップとかが怖いから桂小に行きたいという方もいらっしゃると思います。

- （皆越教育委員） 多分本来どっちに行きたいっていうことを基準に考えて配置したとしたら、多分今とあんまり変わらない数になると思うんですね。
- （井上議長） 難しいですね。正直言って難しい。
- （新宮教育委員） 私が思うのは、やっぱりそれぞれの良さは良さで、それは良いのですが、連携ですよ。一貫校じゃなくて関連校とか、連携をきっちりしていくと、ギャップとか壁がなくなるのじゃないかなと思うんですね。
- （皆越教育委員） 今年の中学校1年生じゃなくて、小学校6年生のときの触れ合う機会って、いつもより無かったんですよ、東小学校と桂川小学校。なおさら上がったときに、反発じゃないですけど、なじめないっていう子がものすごく多くて。
- （畠中教育委員） やっぱり中では、東小が、桂小がっていうのがあっているんですよ。もう、だから、永遠のテーマなのでしょうけど。
- （新宮教育委員） いや、もう桂川っ子だよっていうことで、これは言うならば幼稚園からなのですけど、そこからもうずっと一緒なんだって、最後は桂川中学校で卒業するのだからっていうことで、もうどっちに行っても同じ仲間っていうことで、しょっちゅうしょっちゅう顔を合わせられるような行事をしっかりとっていったりとか、あと、先生同士も本当に仲良く、小学校1年生のときからずっとこうやって、中学校の先生ももう知っていると。もちろん異動はあるけども、知っている、校長先生も顔を知っている、会ったら、もう中学校の校長先生でももう挨拶するみたいな、そういう普通にそういうふうなのができるようになるよと……。
- （畠中教育委員） 違うと思う。
- （新宮教育委員） そういうことがなくなってくるし、あと、地域の住民がもっともっと顔が、みんなの顔がわかるようなものをつくっていくと良いなってすごく思うのですが。子育て世代が孤立しているし、全然わからないですよ、家庭家庭が。
- （河部教育委員） 以前に、町長が例えばということでは言われました。小規模校をやるか、大規模校になるか、半分ずつにするか、2つで。一つは案として、町長はそのとき言われましたけど。
- （皆越教育委員） 中途半端な感がありますね。今のうまみはあるんですけど。
- （井上議長） だから、さっき言いましたように、ざっとした考えでは、いろんなプランがあるかもしれませんが、やっぱりより現実的に考えると、そうそう簡単にはいかないと思います。
- （皆越教育委員） じゃあ現状で、例えば、桂川小学校でちょっと学校に行きづらいとか、いろいろな問題でちょっともう桂川小学校ではという問題になったときに、別の場所にですね、内野

小学校とか、八木山小学校とか。そこに東小学校でっていうことはできないのかなというですね。

- （井上議長） そういうやっぱいろいろ……いろいろあると思います。
- （大庭教育長） 統廃合とかそんなのはちょっと置いて、だから、今言われたように、ギャップを外すとかいうふうなところが、私が県教育委員会の重点を受けた理由の一つがそれなんですよ。だから、結局のところ、幼稚園というか、就学前でしっかり学んだことが小学校で繋がっていない。小学校で学んだことが中学校に繋がっていない。しかも、まして小規模校と大規模校で、これが中学校で繋がっていない。やっぱり桂川で学ぶ子どもたちが、やはりそういった認識の違いのままずっと9年間育っていくのはいけないのだと思って、せめて内容面だけでも幼稚園から中学校まで一貫したものを作っていかうというふうなところから、いわゆる県教委指定の分だったのですね。ですから、学校として教育委員会も含め、そういう方向では今進めていますので、あと、箱物の問題については、ちょっとまた時間等かかることではしょうけれども、場所は違えど、もう目指すところは一つなのだということに進んでおりますので、いろいろ委員の方も、学校も公開をしますので、そういったときにいろいろ御意見をいただければというふうに思います。
- （井上議長） ということで、よろしいでしょうか。
- （皆越教育委員） 当面は、どんなことがあっても良いように積み立てをぜひ頑張っていただきたいなと思います。
- （井上議長） それでは、これで第1回目の総合教育会議を閉めたいと思いますが、よろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

- （井上議長） どうもお疲れさまでした。